

いのちのバトンタッチ

— 映画「おくりびと」によせて —

青木新門

はじめに

みなさんこんにちは。ただいまご紹介に預かりました青木新門でございます。私がひょんなことから葬儀社に勤めまして、ご遺体をお棺の中にお納めするという、いわゆる納棺の仕事をしていました頃の現場体験を『納棺夫日記』という本に著しましたのは、今から17年前の1993年3月のことでした。社長一人、社員一人という富山県の小さな出版社から500部印刷したのが始まりです。その頃は500部を刷ってもすぐに無くなって、それでも1000部ほど刷りましたでしょうか。そのような状態でした。

ウジ 蛆たちが光って見える

その年の11月ぐらいのことでしたでしょうか、俳優の本木雅弘くんから電話がありました。その時、私の家には娘がおりまして、えらい興奮をして、「お父さん、モックンから電話、モックンから電話」というわけです。その時の私は、モックンとは誰だろうかというような具合でした。彼はインドに行ってきたと言っていました。インドのベナレスというところでたくさんの写真を撮ったんだと。その写真集なるものを出したいから、青木さんの『納棺夫日記』の中から文章を引用させて頂けないかと。そのような電話でございました。ただそれだけの事でしたので、どうぞ、どうぞ、自由にどこでも使ってくださいとお答えしたわけです。

そして翌年に一冊の本が送られてきました。「天空静座—HILL

HEAVEN一」と書かれたちょっと変わった写真集でした。彼がインドベナレスのガンジス河に足を突っ込んだりして、いろんなポーズを収めた写真集でした。その中に樹木希林さんとか瀬戸内寂聴さんとか中沢新一さんなどが文章を添えているというものでした。その中に、彼が上半身を裸にしてガンジス河に足を突っ込んでいる写真があります。手のひらに沙羅双樹の葉っぱを乗せて、その上に蠟を乗せて火をつけてガンジス河に流す場面です。インドには送り火という風習がありまして、日本でいえば精霊流しのようなものですが、そのような真似をして、彼がガンジス河に火を流そうとしている。そのような場面がございました。そのページの左側に白い文字が見えますが、それが私の『納棺夫日記』の中から引用された文章でございました。そこに何が書いてあるのかと申しますと、

何も蛆の掃除までしなくていいのだけれど、ここで葬式を出すかもしれないと思って、私は蛆を掃き集めていた。蛆を掃き集めているうちに、一匹一匹の蛆が鮮明に見え始めた。ただ畳を必死で逃げている蛆もいる。柱をよじ登っている奴までいる。蛆もいのちなんだ。そう思うと、蛆たちが光って見えた。

という文章です。私は大変驚きました。と言いますのは、私の本にはいろいろなことが書いてあるのだけれども、よりによって蛆が光って見えたという文章を彼が選んでいるわけです。これは17年前の写真でして、彼は現在43歳ですから、26歳の時の写真ということになります。26歳の若い青年が、俳優が、それも少し前までアイドルとしてチャホヤされていた男が、蛆が光って見えたという文章を選んだということに私は大変驚きを覚えました。と言いますのは、仏教に「一切衆生悉有仏性」という言葉があります。生きとし生けるものは、みないのちであるという捉え方だと思います。そのような思いで私が書いた文章でございました。

ある日、警察からお棺を持ってきてくれと言われまして、お棺を届けましたら、部屋中が蛆だらけになっていました。真夏に一人暮らしの老人が亡くなって、誰も気づかなかったというご遺体でした。布団をめくってびっくり致しました。内臓が全部蛆に食べられて、その中

でうごめくように蛆が無数にいるわけです。そのようなご遺体でした。犯罪かも知れないということで、富山医科大学の解剖室まで運びまして、帰ってまいりましたら、部屋中が蛆だらけでございます。東京の方から親族の方がこちらに向かっているとのことでした。その方がお見えになる前に部屋ぐらい掃除をしておかなければいけないだろうと思って、私が蛆を掃き集めていた時の光景でございます。

本木雅弘くんの感性

そのような文章を本木雅弘くんが選んでいるわけです。若いのにいい感性をした、いい俳優だなあと感じました。このようなことを感じながらこの写真を見ておりました。

それだけのことだったのですが、しばらく経ちまして、本屋に行きましたら、一冊の本が目にとまりました。『ダヴィンチ』という雑誌です。私は初めて見る本でした。その表紙には、本木雅弘くんがソファに寝転がって黒い本を持っていました。その黒い本をじっと見てみますと、私の書いた『納棺夫日記』の初版なんですね。びっくりしました。買ったことのない雑誌を買って、家に持って帰りました。帰って中を覗きましたら、本木雅弘くんがインドへと行った話などが書かれており、本木雅弘特集のようなものでした。インドのベナレスへ行って、大変カルチャーショックを受けた。そこには生と死が当たり前のようにつながっている。というような書き出しで文章が載っておりました。

みなさんはインドベナレスというところへ行ったことがあるかも知れませんが、私は、三島由紀夫さんの『豊饒の海』だとか、遠藤周作さんの『深い河』などに書かれる最終場面のインドベナレスに触れ、関心を持ち、何回か足を運んだことがあります。とにかくあそこは、ヒンドゥー教がバラモン教と呼ばれていた時代から、4000年も5000年も前からヒンドゥー教の聖地中の聖地、インド一番の聖地です。聖地であるがゆえにインド各地から死に場所を求めて来られるおじいちゃんやおばあちゃんがたくさんおられます。どうせ死ぬのであれば、そこ

で火葬されて、遺灰をガンジス河に流してほしいと思っておられる方がたくさんいます。

インドには現在の日本のように固定された火葬場というものがありません。農村などに行きますと、村はずれにあるいちばん近い川の河原で薪を積んで、その上にさらしてグルグル巻きにしたご遺体を載せて、また薪を載せて火をつけるわけです。荼毘という風習が4000年も、5000年も昔からあります。お釈迦さまも、ガンジーやネールも同じようにして焼かれております。何はともあれ、このベナレスというところは、聖地中の聖地であるがゆえに、全インドから熱心なヒンドゥー教の方々が来られます。来たらすぐに死ぬるわけではありませんから、巡礼者に食べ物など恵んでもらいながら死ぬ時期を待っているわけです。

そのようにたくさんの方がいるわけです。そうするとどうなるのかといいますと、365日、24時間、火葬が行われているわけです。煙がもうもうと漂っています。その下に死を待つ人がいたり、巡礼者がいたり、観光客がいたり、また物売りがいたり、牛がいたりするわけです。その間でヒンドゥー教の聖者がヨーガをしたりしているわけです。お金が少ししかない人などは、頭だけこんがり焼いて、川に流されるわけです。手や足などは生焼けのままになっていて、スコップなどで川へと流されるわけです。ですからガンジス河に足が浮いています。手が浮いています。そんな川の中で巡礼者が沐浴をしています。そのような場所です。ですから初めて行かれる方は、本木くんだけでなく大変カルチャーショックを受けたりなさると思います。

そのような場所で彼が大変なカルチャーショックを受けたということです。そのような中で、たまたま一緒に行っていたカメラマンというのが私の『納棺夫日記』を持っていました。彼は、インドのホテルの中や、帰りの飛行機の中で読んだりしながら帰ってきたそうです。そして、その中に蛆が光って見えたという文章に大変興味を持ったと。あのような気持ちの悪い蛆が光って見えるものだろうか、そんな世界があるのだろうか、そのようなことを真剣に考えているうちに、この本を何とか映画化できないだろうかと思うようになったそうです。そう思っているうちに、それが高じてきてなんとしても映画化したい

という思いに変わってきたといえます。そのようなことを雑誌『ダヴィンチ』の編集者と話し合っ、タイトルに映画を切望しますとまで書いてあるわけです。

映画『おくりびと』の成り立ち

私はびっくりしまして、手紙を本木くんに書きました。私は見えない世界を書いたつもりであって、それを映像化できるわけがないと思いましたから、『ダヴィンチ』を見ましたが、『納棺夫日記』を映画にするのは不可能ではないかと申し上げたわけです。また、以前伊丹十三監督の『お葬式』という映画がありましたが、そのような厳粛な場面をちかしたような感じで作るのならば、私は映画化などしてもらいたくはありませんとも書きました。しかし、本木さん、もしお作りになるのだったら、あなたがインドで感じた生と死が当たり前のようにつながっていると感じになったその視点で、蛆が光って見えたという生死一如の視座でお作りになるのであれば、なんとかなるのではないのでしょうかとも書き添えておきました。けれども、そのような視座をお持ちの方は滅多にいません。監督やら脚本家が現われると横道にそれていってしまいますから、あなた一人で作られたらどうですかと提案もしました。昔チャップリンの『ライムライト』という映画がありました。あれはチャップリンが監督、脚本、音楽、主演を全部一人で行った映画です。その素晴らしい映画を引き合いにして、あなたのライフワークとしてお作りになってはどうかと申し上げたわけです。その間は誰にも著作権をお渡ししませんから、ゆっくりと作り上げていってはどうかと。

しばらくして彼から返事がきました。彼は26歳、27歳でしたが、書道の5段か6段をお持ちでして、和紙に毛筆で書かれた手紙が届きました。手紙に書かれた字だけで感動いたしました。そこには、次のようなことが書かれていました。「ありがとうございます。しかし、私は一介の俳優です。監督や脚本などは到底できません。しかし、青木さんから映画化を許可して頂いたものと私は受け止めさせていただきます

した。なんとしても映画関係者に働きかけて、映画化を実現したいと思います。どうもありがとうございました。」このような手紙が来たわけです。

それから5、6年間、音沙汰がなくなりました。私もどうなりましたかとも聞きませんでしたし、彼からも何も言ってきませんでした。そうこうしているうちに、これは私が後から聞いた話ですが、7年ほど経ちました時に、長い間諦めないで映画化をしたいと懇願する本木雅弘くんの情熱に心を動かされた一人のプロデューサーが現われましたということです。そのプロデューサーは中沢敏明という方です。時代劇の『蝉しぐれ』などを手掛けた方で、若手の有名な方です。その方が動き出して、やがて制作委員会というものが立ち上がり、松竹、電通、TBS、小学館というそうそうたる企業がお金を出し始めたわけです。そして、小山薫堂という方が脚本を手がけスタートしました。

脚本への腹立ち

しばらく経ちまして、私のところにシナリオと申しますか、初版の脚本が届きました。仮題『納棺夫日記』、原作青木新門と明記されていました。ところが1ページを読んでちょっとがっかりしました。私の本の書き出しというのは、「今朝、立山に雪が来た」というものです。この書き出しというのは大事でして、川端康成の『雪国』に書き始めは、「トンネルを過ぎると、そこは雪国だった」とあり、大変有名です。書き出しでイメージがパーッと湧いてくるようなものがいいわけです。ところが私の場合は「今朝、立山に雪が来た」という冒頭で、富山平野の作品であるということが分かるようになっていきます。ところが脚本には、雪の中を自動車が走ってくる場面から始まるわけですが、かっこいいなと思いながらそれを読み始めた途端、山の名前が鳥海山となっているわけです。鳥海山というのは、出羽山々の一つで、その平野地は真言宗や禅宗などが栄えている地域です。私の地域は富山でして、お葬儀の8割が浄土真宗でして、そこで生まれたわけですから、ものが生まれるというのは、大地だとか、光だとか、風とか、風土とか、さま

ざまな要素から生まれてくるはずだと思っていますから、カチンと頭にきました。しかし、映画だからそんなにむきになってもしょうがないのかなあとも思いました。読み進めているうちに、またカチンとくるわけです。私は10年間ほど納棺の仕事をしておりましてけれども、親族に成り替わりましてお手伝いのような気持ちでやっていました。サービスでやっていました。それが、お金がたくさん貰えるような感じで書かれているわけです。そのうち携帯電話が出てきてまたカチンときて、カチン、カチン、カチン、カチンしながら読み進めていったわけです。そして、最後の方で、石文というような形で終わっているわけです。私は、石文とは何だと思いましたね。これは向田邦子の『男どき女どき』というエッセイに出てくる文章にそっくりそのままじゃないかと思いました。それを取ってつけたように、現代の物語に持ってくるなんてと思いました。石文は、ネイティブアメリカンとかインカなどの言葉のない時代に、自分の思いを石の形に託して相手に伝えたというものです。石文の出ってくる時代ならともかく、現代の内容にくっつけたということですから、そこには必然性も何もないなと感じました。それから一番最後の場面が私にとってはどうしても許せませんでした。それは後から申し上げたいと思います。

『おくりびと』の原作者を辞退

とにかく私はカーッと血が上りまして、制作委員会に手紙を出して、この箇所とこの箇所を直してほしいと申しました。映画はお作りになってもいいと、しかしこの箇所は絶対にこのように直してほしいと、ここはこのようにしてはいかがでしょうかと、10カ条ほど書きまして、制作委員会に送りました。そうしたら、すぐに裁判所の判決文のような返事が来ました。制作委員会としましては、最終決定が出ましたので、どこも一切直せません、また直す予定もございませんと書いてありました。そこでまた私は、カーッと血が上りまして、制作委員会にまた手紙を出しました。それでは題名を変えて頂きたい。原作者青木新門もはずしていただきたいと書きました。作者の名前を外

していただきたい。本は本のままにしておきたいと伝えました。

しばらくしましたら、私の家の玄関のベルが鳴りまして、私が表に出てみますと、プロデューサーなる人物がそこに立っておりました。本木雅弘くんが7年以上もかけてここまで進めてきたのに、今さらなぜ波風を立てるのですか、というようなことを言われました。私は何も波風を立てているわけではありません。私との想いの違いがあるから、どうしても直してくださいと言っているだけの事です。特に、最後の場面は絶対に直してもらわないと困ります。そうでなければ題を変えて頂いて、私の名前を外していただいて、映画は映画で勝手に制作したということにしてくださいと伝えました。しかし、なかなか噛み合いませんでした。

またしばらく経ちまして、今度は本木雅弘くん本人から電話がありまして、一度お会いしたいとのことでした。聞くと、もうすでに富山に入っているようで、致し方なく宿泊先のホテルまで会いに行きました。その日は雪がちらちらと降っておりました。ですからどこかに入ろうということで、私が知っていた小料理屋に向かいました。部屋に入ると本木雅弘くんはきちっと正座をしておりまして、まるでその様子が『坂の上の雲』の秋山真之のようでした。芸能界でこれだけ律義で礼儀正しい人間がいるのかと驚きました。そのような様子であった彼に私はお話ししました。ここまで私を訪ねてこられたことは大変ありがたいと、感動しております。ですから映画のシナリオ通り映画をお作りになってください。ですけど、絶対条件として題名と名前だけは外して頂きたい。それだけ守って頂ければ、本のどこを引用されていても、後から文句は言いませんから、安心してそのシナリオのままお作りになったらどうですか、とお伝えしました。このようなことを話したら、彼はようやく目の前の料理に手を付けてくれました。

このような彼との裏話があるわけですが、それからまた1年ほど音沙汰がなくなります。私自身も映画の話などはすっかり忘れておりました。そんなある日です。手紙が一通きまして、裏を見たら本木雅弘と書いてありました。中を見えますと一行だけ書いてありました。内容は、完成披露試写会が東京有楽町の国際フォーラムという場所で

ありますので、ぜひとも見に来て下さいと書いてありました。特別招待券が同封されていたので、私はそれを持って東京の有楽町まで見に行きました。見に行きまして、映画が終わって、一番最後のクレジットタイトルというところで、原作者も青木新門という名前も出てきませんでした。そして映画の題名が『おくりびと』という題に変わっておりました。私は、約束を守ってくれたなと思いました。

アカデミー賞の受賞

私はA 1番という席に座っておりました。映画が終わったら、監督の滝田洋二郎さんや山崎勉さん、広末涼子さんだとかが壇上に出てまいりまして、マスコミが50社ぐらいフラッシュをたいていました。しばらく眺めておりましたが、さて帰ろうと思ひ席を立つと、本木雅弘くんが近づいてまいりました。そして、一言「いかがでしたか」と尋ねてきました。私は本木くん「いや～、いい映画になったね。脱帽します。俳優さんたちの演技力は素晴らしいものですね。そして青木新門を外して頂きありがとうございます。」と伝え、その会場を後にしました。

ところが、一昨年23日だったでしょうか。突然、本木雅弘くんから電話がありまして、出た瞬間「ノミネートされました」と興奮しておりました。世界各国から100本ほど集められた映画の中から5、6本の映画が選ばれることをノミネートというそうですね。その時には私は瞬間的に、またリップサービスの何の根拠もなく本木くん「そこまでいったのならアカデミー賞をとれるでしょう」と伝えました。すると本木雅弘くんというのは、律義というか、くそ真面目というか、「それはどのような根拠で言っておられるのですか。なぜとれるとおっしゃられるのですか」と言って、なかなか電話を切ってくれないわけです。私はまいっちゃって、次のようなことを話しました。「本木さん、比叡山を開山された最澄という方は、一隅を照らす、これ国の宝なり、とおっしゃった。一隅を照らす光というものは、わりかし普遍性があるわけです。ですから蛆が光って見えたというのは、オスカーの光に

繋がっているかもしれませんよ」と言ったわけです。ところがそれがまた悪かった。本木くんはすぐさま「それはどういう意味ですか」としつこく聞き返してくるわけです。それで私は続けて、「本木さん、あなたはインドへ行って来られたでしょ。インドというのは11億からの人間がいます。ですから年間750万から800万の人々が毎年亡くなります。そんなインドで10人か20人か知りませんが、行き倒れの人を抱えて、死を待つ家というところに運んで体を綺麗になさって、自分の腕の中で死を看取るということをなさったのは、マザー・テレサという方です。そのマザーの行為というのは、インド全体の行為から見たら針の穴を照らす一隅よりも小さい行為に過ぎないですよ。しかし、その小さな光というのは、ノーベル平和賞を受賞されたのですよ。そのような意味で言ったわけです」とお伝えしました。何はともあれ、私はオスカーをとるのではないかと思います。

というのも、あの映画がハリウッドへと上がっていった時、審査が始まる前に、大統領が替わったわけです。あの映画はブッシュ大統領の時代でしたらとれていなかったと思います。アメリカの三流紙などに、今度のアカデミー賞はイスラエルの戦争映画がとるであろうと発表までしていました。その映画もなかなかいい映画でした。しかし、戦争映画です。審査の前にブッシュ大統領からオバマ大統領に替わりました。では、なぜオバマ大統領に替わったら『おくりびと』がアカデミー賞をとれるのかということです。私はオバマ大統領の政治的能力などは分かりません。しかし、オバマ大統領の一つの行為に私は非常に感動を覚えました。大統領選挙の真っ最中に、全米から6万人集まっていた選挙の大会をキャンセルして、ハワイに住む自分を育ててくれた祖母の危篤に足を運んだわけです。日本の政治家であつたら選挙中に身内のお通夜などに行く人は一人もいませんよ。それは政治家ばかりではありませんね。中村獅童だって父親の危篤状況の時には、舞台に立っていましたし、星野仙一だって、父親が亡くなった瞬間には日本シリーズをしていました。もっと極端なのは、北海道で撮影された『鉄道員』という映画がありました。何万人もいた炭鉱が閉鎖になって、一人か二人しか降りない駅の駅長を高倉健が演じているとい

う映画です。娘が亡くなったその瞬間も、誰も降りてこないその駅のプラットフォームの上で佇んでいました。大竹しのぶ演じる奥さんが旭川の病院で亡くなったその瞬間もプラットフォームの上で佇んでいました。いのちよりも仕事という感じの映画でした。そのような映画でも感動はします。しかし、オバマ大統領は逆でした。自分が大統領になれるかなれないかどうか分からない真っ最中に、自分の一人の祖母の危篤に行ったということです。すごいことであると感じます。そのような人物を大統領に選んだということは、アメリカの価値観が変化しているのではないかと思いました。その変化があつ『おくりびと』にバックアップするならば、アカデミー賞をとれるかもしれないなと思っていました。

そして、その1か月後の2月23日の1時でございました。『おくりびと』アカデミー賞受賞と流れました。やっぱりアカデミー賞をとったなと思いました。その5時間後ぐらいに「とれました」という電話がありました。私と本木雅弘くんとの間には、このような裏話があるわけです。

今でも私は「映画は映画、本は本」というように思っています。ある友人の奥様などは、著作権を放棄しなければ、たくさんのお金が入ってきたわよ、などと言います。しかし、お金の問題ではないのです。それは、私の人生やその現場で体験したことがあったからです。

後生の一大事

一つ例を挙げてお話をしてみたいと思います。昔、比叡山に源信という方がおられました。『源氏物語』の中で横川僧都という名前で登場される方です。紫式部も大変尊敬しておられ、法然上人も大変尊敬されておられました。親鸞聖人はもちろんの事、七高僧のお一人に加えておられる方です。その源信が15歳の時に、村上天皇の前で仏法を説く講師に選ばれております。現在の高校一年生である15歳で天皇の前において講義をする。おそらくは、やがて比叡山をしょって立つような秀才だと思います。その方がある日天皇の前で仏法を説いて大変に誉められま

した。帰りに絹織物などを三反ほど褒美の品として頂きました。あまりにもうれしいので、奈良に住むお母さんにその反物を送りました。しばらくするとその反物が送り返されてきました。そこに添えられていた和歌が有名なお歌です。「後の世を渡す橋とぞ思ひしに 世渡る僧となるぞ悲しき」という和歌で、まことの求道者となり給へということです。私が安心して死ねる為に後の世を渡す橋となってほしいと思ってあなたを比叡山へと上げたのに、あなたはこの娑婆を上手くわたっていく僧に成り下がったのか。お母さんは悲しい。本物の僧になってほしいという意味の和歌です。彼は我に返って横川に移り住んで、そこで著された書物が『往生要集』というものです。日本の浄土門に大きな影響を与えた書物でございます。

私は今何をお話ししているのかと申しますと、私も毎日亡くなった方のご遺体に接しながら、この死者たちはどこへ逝くのだろうかと、どうなるんだろうというようなことを真剣に考えながら、仕事をしていました。そして、死にゆく人や死者や、偶然出遇った親鸞聖人の『教行信証』などを読んでいるうちに、なんだそういうことだったのかということをつかんだ上で、歓喜踊躍して書いたのが『納棺夫日記』でございました。映画「おくりびと」では、その部分が全部カットされています。映画に見られるのは、近代のヒューマンイズム、ヨーロッパ思想で終わっているもので、宗教は全く映画の中に描かれていないわけです。蓮如上人は「後生の一大事」と言われましたが、映画には「後生」がないのです。例えば、「それ、八万の法蔵をしるといふとも、後世をしらざる人を愚者とす」というお言葉が蓮如上人の『お文』にございます。私がなぜこの文章を引用したのかと申しますと、私が文学をやっていた時にお付き合いをしていた人たちというのは、私よりも10歳上の方々ばかりでした。吉村昭さんにしても江藤淳さんにしてもそうです。江藤淳さんなどは、あれだけ近代日本の知識人と言われた人が、死に直面した時、見苦しいほど狼狽えて、しかも「形骸を断ずる」という遺書まで残して死んでいきました。何だこれはと思いました。「後世」を知らないということは、こんなに狼狽えるものかと思いました。人間というのは、行き先が不明だと、今が不安になります。

明日どうなるか分からないというと、一番今が不安になるわけです。明日を放置したままどうして今をケロッとして生きているのだろうか。だからマザー・テレサに、「こんなに美しい国なのに、こんなに暗い顔をして生きている国の人々を見たことがない」とまで言われてしまうわけです。「後世」を知らないということは、そのようなことだと思います。

私の生い立ちと一枚の写真

私が生まれましたのは、新潟県にほど近い富山県の黒部平野というところ。そこで生まれたのですが、5歳の時までは育っていません。5歳の時に父と母に連れられまして、中国東北地方の満州というところに行きました。そこで終戦を迎えたのが8歳の時でした。父は終戦直前にシベリア戦線に行ったきりになりまして、母と私と向こうで生まれた妹が3歳でおり、弟が1歳でおりました。そんな親子が逃げ惑っているうちに、日本人同士が集められまして、今でいう難民キャンプのようなところに入れられて、引き上げの時を待っておりました。そこへ入ってすぐ弟は死にました。あのような状況になると乳飲み子から先に死んでいきます。母親の乳が出なくなるからです。やがて発疹チフスが流行しました。母が発疹チフスにかかりまして、隔離されてしまいます。私と妹だけが取り残されるように収容所にいました。そんなある朝、目が覚めたら妹が死んでいました。その妹を抱きかかえて、建物の裏にあった火葬場のようなところにポンと置いてきました。

そのような体験がありますが、その後、戦後の時代を生きていくことに必死で妹のことなど全く忘れておりました。ところが今から16年前に、ある写真展を見に行きました。それを見たら、満州の収容所で妹の亡骸を棄ててきた場面が鮮明に蘇ってきました。

これは私が小学校1年に入った時の写真です。次のこの写真を見てもらいたいと思います。これはどのような写真かといいますと、昭和20年8月に長崎に原子爆弾が落とされた後に撮影された写真です。アメリカのジョー・オダネルという海兵隊従軍カメラマンが撮影したも

のです。そのジョー・オダネルさんはアメリカに帰ってから、ホワイトハウスの専属カメラマンになられまして、トルーマン、アイゼンハワー、ケネディ、ジョンソン、ニクソンと、5人の大統領の専属カメラマンになられた大変有名な方です。その方が今から18年前に定年を迎えられまして、軍の規律に違反して撮っていたトランクいっぱいのネガを現像し、アメリカで展覧会を開こうとしたら、バッシングを受けて開催できませんでした。それで日本に来て写真展を開かれたわけです。それを偶然私が見に行ったということです。そうしましたら、広島、長崎の悲惨な写真がたくさんありました。このご紹介した写真は隅の方にありました。この写真の横にジョー・オダネルさんのコメントというものが掲示されていたわけです。それを読んでいるうちに涙がでて止まらなくなりました。このような内容です。

この少年は弟の死体を背負って火葬場にやってきた。やがて帯をほどき、おもむろに弟の亡骸を熱い灰の上に置いた。少年は兵隊のように直立し、顎を引き締め、決して下を見ようとはしなかった。ギュッと噛んだ下唇がすべての心情を物語っていた。火葬が始まると少年は静かに背を向け、その場を立ち去った。

それを読んでいるうちに涙が出て止まらず、嗚咽しながら泣いてしまいました。そのうちにどうしてそんなに泣いているのですかと聞かれました。実は、私は満州でこの少年と同じことをしてきたんです。それを思い出して泣いているんですとお伝えしたら、私を抱きしめてくださいまして、その胸の中で泣いておりました。

この写真に写っている背中にいる子は死体なんです。長崎に原爆が落ちたのは8月9日です。これは9月の写真ですから、1か月生きていたわけです。もしこの子にお父さんやお母さんがいたらおそらくその方が抱えてくるだろうと思います。私だって、もし母がいれば妹の亡骸は母が背負って火葬場へと向かったと思います。私は妹をやっとの思いで抱えながら火葬場まで運んで行ったことを思い出して泣いてしまいました。おそらくこの少年には、お父さんもお母さんもおばさんもおじさんもおられないのでしょう。

私はこの少年が撮影された場所がどこか必死に探しました。そして

分かりました。長崎の浦上天主堂がありまして、その前に川が流れております。小さな河原でして、そこは爆心地ゼロです。ですから誰もいなかったのだと思います。ともあれ、私はこの子と同じ体験をしたわけです。再度、私の昔の記憶が蘇りまして、これが私の原点なのだと思います。

私も一人ぼっちになったわけですが、一人ぼっちになった時に、その収容所全体が日本へと帰れるということになりまして、みな喜んでいましたが、私は複雑な思いでした。その引き上げの2日前に、発疹チフスと栄養失調で起き上がるのもやっとであった母が突然現れました。立つのもやっとであった母の手を引いて富山の黒部平野まで帰って行くことができました。65年間、このように元気に生かさせて頂いております。有り難いことだなあとと思います。

さて、何はともあれ黒部に帰ってきたわけですが、村には祖父と祖母がおりました。ちょうど農地改革というものがありまして、田畑がすべてなくなって田んぼの真ん中に屋敷だけが残ってありました。父親もいませんでしたし、生産性がゼロでありますから、母はすぐに家を出て行ってしまいました。すると私はまた一人ぼっちになって、祖父と祖母に育てられて大きくなりました。祖父は戦後の変化に対応できなくて、ぼーっとしているような状態でした。物を売って生活していました。祖母が家にあるものを片っ端から売り始めました。最後には仏壇まで売ってしまいまして、家中空っぽの状態でした。そのような時に東京の大学に入りました。早稲田大学の政治経済学部というところに入ったわけですが、一銭もお金がありませんでした。分家の叔父たちが相談して、屋敷を田んぼにして近所の人を買ってもらったりしながら、入学金の足しにしたりしておりました。そこまでして大学に入ったのはいいのですが、入ってしばらくしたら60年安保というのがございました。岸内閣打倒などといって、国会議事堂の周りを走り回り、単位も取らないで、そんなことばかりをしておりました。そして、安保の挫折感を味わいながら東京にいる時に、お袋から電報が届きました。

その頃、母親は富山の駅前で飲み屋のようなものをしておりました。

長く会っていなかったその母親が危篤という電報でして、帰ることにいたしました。なぜ母親と会っていなかったのかといいますと、中学2年生の時に母が恋しいと思って、母の住んでいる家を突然訪問しました。そうしたら、知らない男と寝ていたりしていたものですから、それ以来、母と子供の間には距離感ができてしまいました。とにかく、入院している母のもとに行きまして、母の経営していた飲み屋を手伝うようになりました。当時、東京の大学ではほとんど休講ばかりで講義がありませんでしたから、しばらく富山の方で手伝いをしていたわけです。それから、しばらくして飲み屋の近くを歩いていると、初恋の女性にばったりと会いまして、恋に落ちてしまいます。私は恋に夢中になってしまいまして、東京にも戻らず、大学もそこで終わってしまうわけです。

ところが、そのころから私は詩を書きだしました。詩を2、3編書きましたら、富山の詩人の方々に大変誉められまして、新聞に掲載されたりしました。詩人気取りで母親のお店を手伝いながら、恋人と過ごすうちに、母親と経営方針で喧嘩になりました。そして、私は母親の飲み屋を飛び出しまして、自分で店を始めました。絵描きやら詩人などの協力を得て、たいそう変わったお店をやり始めました。そうしたら来るお客というのは、貧乏お絵かきだとか、貧乏詩人とか、貧乏作家というような、そんなのばかり来るわけです。あのような連中というのは、友達をたくさん連れてきて、一晩中居座っておきながら、一銭も払っていないですね。一緒になって飲んでいるわけですから、全く商売になっていないわけです。

そんなある日、お店に吉村昭という作家が入ってきました。黒部第三ダムの『高熱隧道』という小説を書いた方です。その頃、私は吉村昭という人物をあまり知りませんでした。自分が知らない作家というのは、あまり大した作家ではないと思っておりましてから、適当にあしらっておりました。すると、一緒に来た新聞記者が、この方の奥さんは津村節子だというわけです。それで私は、津村先生の旦那様ですかと驚いたわけです。ちょうど、津村節子さんが『玩具』という作品で芥川賞を取ったばかりでしたから、私も知っていました。このよ

うに、私はたまたま入店してきた吉村昭さんとの出会いがありました。私は詩を書いておりましたが、吉村さんから小説を書いてみないのという勧めを受けまして、そっちの方が金になるかも知れないと思い書き始めたわけです。

納棺夫の縁

何を書いたかと申しますと、戦後10年ほどの時期、祖父が何もせず、ただぼーっと過ごしている中で、祖母が家のものを次から次へと売っていき、しまいには仏壇まで売り飛ばしてしまったことを淡々と書き上げたわけです。それを吉村さんのもとへ送りましたら、それがきっかけで、丹羽文雄先生が主催しておられた『文学者』という雑誌にその小説が掲載されました。その後、東京へ一度出てきなさいということで、出ていきました。

そうすると、吉村昭さんだとか、津村節子さんだとか、三谷晴美さんなどがおられました。三谷晴美さんというのは、瀬戸内寂聴さんのことです。あの頃は、近づくと手ごめにあいそうなくらい元気な方でした。そのようなそうそうたる方々がおられる中で、私の作品が一度雑誌に載ったわけです。そうするとどうなるのかと申しますと、私は富山駅から上野駅に着くまでに錯覚してしまいまして、作家にでもなったかのようなつもりになりました。それで、原稿用紙などを大量に買い込みまして、原稿を埋める毎日を過ごしておりましたら、富山のお店のことなどはすっかり忘れてしまいまして、倒産ということになったわけです。倒産は、するものではないですね。昨日までニコニコと魚を運んでくださっていた魚屋さんが、その日をさかいにえらい剣幕で怒鳴り込んでくるわけです。私はもういっそのこと東京へ逃げようと思いました。その時です。今まで黙っていた妻に足を掴まれまして、妊娠しているからと告白をされたわけです。ドキッとしましたね。ですから逃げるきっかけを失ってしまいました。その間に六畳一間のアパートに引っ越しまして、これぐらいの苦勞をしなければ、いい小説は書けないなんて言い訳をしながら生活しておりました。それから妻

が子供を出産してアパートに戻ってきたわけですから、赤ん坊というものは、夜になると大泣きするわけですね。1時間置きぐらいに泣くわけです。小説を書いておりましたら、六畳一間の中でギャーギャーと泣くわけです。やっぱり妻と子供を捨てて逃げてやろうと決意しまして、いつ逃げようかと考えておりました。

子供のドライミルクも買えないくらいお金がありませんでしたから、当然、妻とは喧嘩になりまして、ちゃぶ台がひっくり返るぐらいのものでした。すると、ちゃぶ台がひっくり返った拍子に私の顔に新聞が当たり、下に落ちた新聞の求人欄が目にとまったわけです。そこには「新生活互助会 社員募集」と書いてありました。何の会社か全くわかりませんでした。住所を見ると私のアパートのすぐそばでした。取りあえず、生活が苦しかったものですから、すぐに履歴書を書いて出向いて行ったわけです。その会社に行って入口の戸を開けたら、中には机が二つだけありました。その机に橋渡すようにしてお棺が置いてあったわけです。これは駄目だと思って、戸を閉めて帰ろうと思った時に、人間の出会いというものは不思議なものです。入口の戸が閉まる寸前のところで、その隙間からお棺の向こうに座っていた男と目が合ったわけです。それで、入っていかざるを得なくなりまして、仕方なしに入って行きました。入って行って取りあえずその履歴書を渡したら、その男はケラケラと笑い出しまして、君も倒産したのか、俺も倒産したんだと言ってきました。それでその男が私と一緒にやらないかと言って出してきたのが、平安閣という日本で最初に結婚ビジネスを起した会社のパンフレットでした。こんなことをやろう、と言ってくるわけです。と言われても、倒産して六畳一間の家に住んでいるような人間に対して、愛知県の別会社のパンフレットを出してと言われてもねえ。私は、この男は詐欺師だと思いましたね。取りあえず、私はこれまでの経緯を話して、ドライミルクも買えない状況なんだと伝えたら、その男は私に1万円札を手渡して、その薬屋でドライミルクを買って、家に届けて出直してこいと言いました。私は、その1万円を貰ったばかりに、次の日からその会社に行くことになったわけです。

納棺と現代の事情

私はそのような世界へ行こうと思って入ったわけではありません。あくまでドライミルク問題を解決するために、アルバイトのつもりで入った会社が、葬儀を取り扱っていたということです。当時、私がそのような世界に入ったころは、富山県というのは6、7割が自宅葬でした。みなさんをご存知だか知りませんが、日本の国の昭和20年、30年代というのは、全国平均で90パーセントが自宅死亡でした。現在は、90パーセントが自宅外死亡です。病院か施設か、そのようなところで亡くなっておられます。私がそのような世界に入りました頃は、病院に入院しておられる方でも、何としてでも死ぬときは畳の上で死ぬんだという方が大勢おられました。医者が駄目だと言っても自宅へと戻り、親族に看取られながら死ぬという光景がまだある時代でした。そのような時代でしたから、納棺ということは100パーセント親族の方がやっておられました。いくらその場に村の長老などがおられても、一切口出しはしませんでした。納棺については、すべて親族が行うのだという暗黙の風習があるわけです。北陸の方は、ご遺体を他人に触らせるといことがありませんでした。他の県は分かりませんが、主に身内の男の方がやっておられました。

この間、『おくりびと』の次の年にアカデミー賞を独占した『スラムドッグ\$ミリオネア』というインドの映画がありました。あの映画の原作者ヴィカス・スワラップが今大阪の総領事館に来ておられます。毎日新聞がスワラップさんと対談しろということで、総領事館まで行ってまいりました。その席で、『おくりびと』の話が出た時に、インドに『おくりびと』を持って行っても駄目ですよと言われました。どうしてですかと尋ねましたら、彼は、100パーセント今でも親族の方が、日本でいう納棺の儀式をやっておられるからです、とのことでした。『おくりびと』をインドの人に見せたら、なぜ身内の納棺を他人にやらせているのかと思われてしまうそうです。ところがインドでは、納棺を行うのはすべて女性だそうです。家にいる女性すべてが、亡くなった方の体を綺麗に拭いて、そこに白檀などのお香の粉をまぶして、その上

からさらしをくるくる巻いて、女性の場合ならばサーリーなどで巻いて、仕上げるということだそうです。

しかし、私とその世界に入った時は、すべて男性が行っていました。しかし、男性は酒ばかり飲んでなかなか作業が進みませんね。人間は死にますと皮袋に水を入れたようなものです。袖を通すためちょっと傾げるだけでも、耳や鼻や目や口から汚物がたくさん出てまいります。そのようなものは、現在の皆さんは見たことがないと思います。なぜならば、90パーセント自宅外死亡ですから。病院や施設などで、看護婦さんや介護の方が綺麗にして下さいます。霊安室の一番近くにあるナースセンターにはエンゼルセットというものがあります。真綿の棒みたいなもの、紐みたいなのが何本か入っています。亡くなられた方の穴という穴に真綿を詰めて、不快感を抱かせないようにして、ご遺体をご自宅へお運びするわけです。みなさんは綺麗になったご遺体しか見ることはないからです。しかし、昔はそうではありませんでした。田んぼに行ってみると、おばあちゃんが死んでいたというような状況ですし、おまけにドライアイスなどはありません。今だとマイナス70度のドライアイスというものがありまして、胸の上に入れておきますと、食道の中まですべて凍ってしまいますから、何も外には出なくなるわけです。昔は、男衆が酒を飲みながら、嫌々始めて、仕舞いには横から口出しする長老みたいなのが現れます。まあ、いろいろなご家庭があるものです。葬儀社に関わっていた私は、身内の方々がされる納棺の様子を見ておりまして、ある時に口を出してしまいました。すると、出来るならなぜもっと早く言わないんだと叱られまして、お手伝いをする羽目になりました。当時、葬儀社というのは、納棺というのに関して全く手を出しておりませんでした。納棺というものは、親族、身内がやるという風習でしたから。しかし、それ以来私がたびたび納棺のお手伝いをしておりまして、ある時、その話が社長の耳に入ったわけです。すると、社長が私に今晚付き合えと言いまして、飲み屋へと連れ出されました。すると社長から、お前はそこまでやってくれていたのかと褒められまして、これからも熱心に頑張ってくれなどと言われながら、どんどんと深みにはまっていく

ことになってしまったというわけです。そのうちに2、3人だった会社も10人ほどの会社になりました。

毎日、お葬式に出ていくようになった頃のことです。いつのまにか会社の中でお葬式にでなくてもいいと言われまして、納棺専従社員のようになっていました。祭壇などを組みに行っていたら、他でできたお葬儀の納棺に間に合わないわけです。ですから、いつも会社において、倉庫の掃除をしたり、お棺を作ったりしながら、納棺の時間になったら出ていくというような特殊な社員に、私はなってしまったんですね。

納棺夫への差別

その頃の富山県では、火葬場で働いておられる方の事を隠坊といいました。この隠坊というのは、差別用語です。この間、大阪で同和の大会に行ったら差別用語だから使ってはいけないといわれました。ともかく、その隠坊の住んでおられる隣の村の御嬢さんがお嫁に行くという時に、隠坊が住んでいるような村の娘はいらないとまで言われる時代でした。つまり、死に関わるということだけで嫌われるということです。そのような時代でした。ですから、私が納棺夫専従として働きだした途端、分家の叔父が突然現れましてこのようにいうわけです。「昨日法事の席でお前の話が出た。聞くところによればお前は死体を拭いて歩くというじゃないか。すぐにそんな仕事辞めろ。この狭い富山の町でそんな仕事に就かれたらわしら親族は町も歩けないじゃないか。お前は親族の恥だ」とまで言われました。会いたくない人に次から次に文句を言われると、こちらも反抗的になりますね。

あの頃の私もだいぶん歪んでおりました。人間は失敗と挫折を繰り返していきますと、いつのまにやら心の中に闇ができると申しますか、父を恨み、母を恨み、社会を恨みというように、歪んだ思想が身についてまいります。そのような状態でしたから、親族から絶交だと言われたら、こっちこそ絶交してやるというような具合でした。しかし、それだけではありませんでした。友達もいなくなりました。やがてニュースだけは速く伝わります。青木は何やら葬儀社のようなところに勤め

て、死体を拭いて歩くらしいと広まっていきました。

そのような状況が続きますと、だんだんと仕事に対するコンプレックスのようなものを抱くようになりました。誰にも会わなくなりました。道を歩くにしても知り合いに会うことを恐れるようになります。隠れるように会社へと行って、隠れるように生きて、閉じこもりのような状態で家にいるというような毎日でした。

そんなある日、吉村昭さんから手紙が来ました。あの頃、文学者の彼は編集長をしておりました。丹羽先生が亡くなられ、『文学者』という雑誌は廃刊となりまして、書き溜めていた小説を吉村さんのところへ送っていました。その手紙には、「送られてきた小説の一作目は将来性があると思ってなんとか雑誌に載せたけれども、二作目は全く読むに堪えない」とぼろくそに書いてありました。それで私はがっくりときまして、今まで書いていた原稿用紙を全部燃やしたりして、作家になる夢も絶たれたような気がいたしました。友達もいない、親戚とも会っていない、誰とも会っていないという状態の中で、妻のそばに近寄ろうとしたら、妻にもこう言われました。「今日も納棺の仕事をしてきたのか」と。それで「今日は2件してきた」と言ったら、「死体を触ってきたような手で触られたらその気になれない」と言われました。その中で妻から言われた言葉が、汚らわしいという言葉でした。「おくりびと」の映画の中で、広末涼子さんがそのまま使っていましたので、びっくりしましたがけれども。そんなことよりも、妻は、「子供が小学校に入るまでには今の仕事をやめてほしい」と言ってきました。「お父さんの仕事は何ですか」と聞かれたときに、娘が答えられないようでは困るということです。私は、それもそうだなあと思いました。それで、私は納棺夫の仕事をやめようと思いました。

納棺夫の尊厳

そのような思いになりましたので、次の日に辞表を書いて持ってきました。その日の日中でした。一つの事件に出会います。この事件がなかったら辞めていたと思います。その事件の事を本に書きました

ので、ちょっと読み上げてみたいと思います。

今日の家は、行き先の略図を手渡されたときは気づかなかったんだが、玄関の前まで来てはと思った。東京から富山へ戻り、最初に付き合っていた恋人の家であった。十年たっていた。腫の澄んだ子だった。コンサートや美術展などよく行った。父がうるさいからと午後十時までにはたびたびこの家まで送ってきたものだった。車の中でキスしようとする、父に会ってくれたらと言って拒絶されたこともあった。その後も父に会ってくれと何回も誘われたが、結局会うことなく終わってしまった。しかし、醜い別れ方ではなかった。横浜へ嫁いだと風の便りで聞いていた。来ないかもしれないと思い、意を決して入って行った。本人は見当たらなかった。ほっとして湯灌を行った。もう相当の数をこなし、誰が見てみもプロと思うほど手際よくなっていた。しかし、汗だけは最初の時と同様に、死体に向かって作業を始めた途端に出てくる。額の汗が落ちそうになったので、袖で額の汗を拭こうとしたとき、いつのまに横に座っていたのか、額を拭いてくれる人がいた。澄んだ大きな目いっぱい涙を溜めた彼女であった。作業が終わるまで横に座って、私の顔の汗を拭いていた。退去するとき、彼女の弟らしき喪主が、両手をついて丁寧に御礼を言った。その後ろに立ったままの彼女の目が、何かいっぱい語りかけているように思えてならなかった。車に乗ってからも、涙を溜めた驚きの目が脳裏から離れなかった。あれほど父に会ってくれと懇願した彼女である。きっとお父さんを愛していたのであろうし、愛されていたのであろう。その父の死の悲しみの中で、その遺体を湯灌する私を見た驚きは察するに余りある。しかし、その驚きや涙の奥に何かがあった。私の横に寄り添うように座って、汗を拭き続けた行為も、普通の次元の行為ではない。彼女の夫も親族もみんな見ている中での行為である。軽蔑や憐みや同情など微塵もない。男と女の関係をも超えた何かを感じた。私の全存在がありのまま認められたように感じた。そう思うとうれしくなった。こ

の仕事をおののまま続けていけそうな気がした。

文学的にこのようなことを書いておりますけれども、あったことは事実でございます。私が大学を中退して、お袋の屋台のような店を手伝っているときに会った人でございます。彼女のお父さんというのは、富山で古くから今でもあります製薬会社の社長さんでありました。コンプレックスで会いに行けませんでした。しかし、彼女は、私の横に座って寄り添うようにお父さんの額を撫でて、また頬を撫でたりしながら、ときどき私の方を向いて涙を見ながら、汗を拭いてくれました。涙目でございますけれども、私がやっていることも含めて、何か丸ごと認めてくれているように私は感じたんですね。人間、追い詰められて追い詰められて、もう行き場がないくらい追い詰められた時でも、何かに丸ごと認められたら、生きているけるのではないかなあと思いますね。なんでもいいです。

理不尽な現代社会

今日の社会は、何かを丸ごと受け止めるという力が本当に衰弱しています。何かにつけて、分別して、頭のいい子、頭の悪い子などと言って、科学的合理思考とでもいいでしょうか。科学の科という字は、分けるという意味もあります。理科、社会科、内科、外科などというように別けて言ったりしますでしょ。トータルではないわけです。科学時代に生きると、そのような癖がついているのではないかなあとさえ思います。

ある少年のこんな詩があります。小学校4年生の男の子の詩です。

今日、学校の帰りにとんぼを捕まえて家に帰ったら、お母さんが可哀想だから放してあげなさいと言った。僕はとんぼを放してやった。とんぼは嬉しそうに空高く飛んで行った。それから僕が、台所へ行ったら、お母さんが箒でゴキブリをたたき殺していた。とんぼもゴキブリも昆虫なのに。

という詩です。少年は丸ごと認めていく力を持っています。とんぼもゴキブリも同じ昆虫だという視点を持っています。しかし、お母さんは分けて考えていますね。今どきのお母さんというのは、近代ヨーロッパ思想のヒューマニズムの中で育っています。ヒューマニズムというのは、日本語に訳しますと、人間中心主義ということです。人間に都合のいいものは、可哀想だから逃がしてあげなさいとなります。けれども人間に都合の悪いものは、叩き殺しても痛みさえ感じないわけです。そのような社会に我々は住んでいます。ブッシュ大統領は、フセイン大統領を殺しても、きっと痛みも感じませんよね。

人間に都合のいいものであればまだよかったです、最近では自分に都合のいいものというようになってきているように思います。例えば、裁判の判決文が全部同じになってきたりしていますよね。あまりにも身勝手な、自分中心的な犯罪ばかりです。そんな犯罪ばかりです。丸ごと認める者をも排除してしまうような社会に、なっているような気がいたします。

秋葉原の事件がありました。事件を起こした加藤という青年は、小学校の時に学校で1番か2番につくほど成績が良かったようですね。しかし、思春期で成績が下がった。お母さんは教育熱心者で、なんとか成績を取り戻そうと一生懸命やった。ところがおばあちゃんはその様子を見るに見かねて、そんなに無理をしなくてもありのまま育てたらと言ったようで、それ以来、母親はおばあちゃんと会わせなかったということです。私が今何を言っているのかといいますと、おばあちゃんが「あるがままに育てたら」といったのは、ありのままを一回は認めようとしたわけですね。そのような丸ごと認めていくようなものさえも、排除していつてしまう社会になっているのではないかと思います。これは危険ですね。

ゴキブリや蛆は叩き殺しても心に痛みを感じない。私が納棺を始めた時に、蛆虫と人に言われたものですから、人に叩き殺されたくないと思ひまして、私はこの詩を書いた少年が大好きですね。人間は誰も私の事を信用してくれない。家のタマだけが私を丸ごと信用してくれていると言って、猫とだけ生きておられるおばあちゃんが何十万とお

られるようですね。

納棺という臨場

何はともあれ、私は丸ごと認められたような気持になりました。翌日から、これまで汚い服を着て嫌々やっていたわけですが、どうせやるならって気持ちになりまして、医療機器店に入って行きまして、お医者さんが着られる白い服を一式買いました。その横にあったお医者さんの往診用のかばんも買って、その中に全部入れました。お坊さんが七条袈裟をかばんに入れて持っていくように、自宅葬の時は、そのかばんを持って出かけていきました。礼節にも服装にも気を遣いながら納棺をしました。人間は結果として同じことをしておりまして、嫌々やっているのと、きちっとやっているのでは雲泥の差があります。かつ社会的評価が違ってくるといことも学びました。

あるところに行きまして、85歳のおばあちゃんをお棺に入れて、通夜祭壇の前に置きました。それから洗面所を借りて手を洗いに行きます。洗って帰ってまいりましたら、なぜかその家の場合、座布団が敷いてありまして、お茶まで用意してありました。白い服を着たまま、座布団の上でお茶を頂いておりましたら、あっちの方から90歳ぐらいのおばあちゃんが、這って来られまして言うんですね。「先生様、私が死んだらあなた様に来てもらえんかね」って予約まで頂けるようになりました。生前予約でございます。以前でしたら、汚い服を着て嫌々しておりましたら、ある家などでは、お通夜が始まるから早く帰れと、追い出されるように帰されたこともありました。それが白い服を着てきちっとやるだけで、座布団が敷いてあって、お茶が出て、先生に様がついて、予約まで頂くようになりました。ギャップというのはすごいですね。

私は本木くんが鰯の刺身を二切れ食べてくれてから、握手をしました。すると彼が、キーワードは何でしょうか、ポイントは何でしょうか教えてくださいと言うものですから、私は、服装と現場が大事ですよとお伝えしました。また彼が、現場とは何ですか、と聞くものですか

ら、私は、現場というのは死の現場だと伝えました。びんと張った緊張感だとか、臨場感だとか、日常生活にはないそのような場というものがあるんだと。オーディションやマネキンなんか使っても何の意味もないですよ。やはりその場に立ち会わないと駄目ですよと伝えました。

彼は偉いですね。札幌の納棺師協会で3回、酒田の葬儀社で2回、顔を隠すようにして、助手で現場に立ちましたね。そして、その中で一番緊張感のあった現場の事を思い出しながら、撮影をしましたと後日聞きました。真面目というか、私は立派だなあと思います。

私もきちっとやるようになりましたから、会社に礼状が来たり、菓子折りを持って挨拶に来られたりということになっていくわけです。それでなくても忙しいのに、だんだんと忙しくなっていくって、違った葬儀社のお手伝いにまで行かなければならなくなりました。その時代は誰もやってくれないわけです。新しい納棺師が来たと思ったら辞めていく。そのような状態でした。そんな中で、私も疲れてくるし、作家になる夢も絶たれ、友達とも会っていない、親戚とも会っていない。なんか心の中がモヤモヤとして納棺師を辞めようと思ひまして、また辞表を書いて持ち歩いておりました。

終末の光顔巍巍

そんなある日、お袋から電話がありました。以前、私に親族の恥だと言った叔父が末期癌で意識不明の危篤状態だから、一度だけでも顔を出しなさいとの内容でした。私はその電話を聞いた瞬間に、ざまぁ見ろと思いました。あれだけ育てて頂いても、最後に親族の恥だとまで言われたことしか覚えていませんでした。しかし、意識不明であるならば一度行こうかと思いました。それで、病室をノックして入った途端に、叔父の連れ合いの叔母が、富山弁丸出しで「あれ、あんたなんちゅうええとこに来らっしゃった。うれしや。さっきまで意識不明やったけれども、今、気がついておられる」と言うわけです。私はドキッとしまして、帰ろうかと思ひましたが、そういう訳にもいかず、叔母に手を引かれて中に入りました。ほっとしました。といひますの

は、当時のプラスチックでできた長い酸素吸入がついていまして、顔がよく見えないわけです。それで、叔母の声に促されて叔父に近づき、ベッドの横の椅子に座りました。その瞬間、意識不明と聞いていた叔父が、手を震わせながら出してくるわけです。またドキッと、思わず叔父の手を握った瞬間でした。叔父の目からぼろっと大粒の涙が出て、口や何か動いていました。私は叔母に、これ何を言っているんだろうかと尋ねたら、「ありがとう」って言っているんじゃないと言った瞬間に、私の耳にも「ありがとう」と聞こえました。聞こえた瞬間でした、私の目からも大粒の涙がこぼれ、「叔父さん、すいません、勘弁してください」という具合になり、土下座して叔父の手を握っておりました。泣きながら帰りました。家についたときに、叔母から電話がありまして、あなたが病室を出ていった時、叔父は息を引き取ったとのことでした。

そんな叔父の葬式のすぐ後でした。私の文学友人で、砺波市に住むお寺の住職がおりました。その住職から一冊の本が届きました。その本はどのような本かと申しますと、その住職の姉さんが砺波市の井村病院に嫁いでおられました。32歳であった息子の名前は、井村和清といいます。32歳の時に癌で亡くなります。癌になってから1年間日記を書いておりまして、その日記を整理して本にしたのが、私の友人の文学仲間の住職でした。それを読み始めた途端に涙が出て読めなくなりました。井村先生が、膝にできた癌を手術によって取って、治ったと思い再検査に行ったら全身に癌が転移していた。その晩の日記をご紹介したいと思います。

癌が肺へ転移した時、覚悟はしていたものの、私の背中は一瞬凍りつきました。その転移数は1つや2つではないのです。レントゲン室を出る時、私は決心しました。歩けるところまで歩いて行こう。その日の夕暮、駐車場に車を置きながら、私は不思議な光景を見ていました。世の中がとっても明るいのです。スーパーへ行く買い物客が輝いて見える。走り回る子供たちが輝いて見える。犬が、垂れ始めた稲穂が、雑草が、小石までが輝いて光って見え

るのです。部屋へ戻って見た妻もまた手を合わせたいほど尊く輝いて見えました。

みなさん考えてみてください。自分が癌になって、手術をして治ったかなあと思って検査に行ったら、全身に癌が転移していた。その晩に、かっこいい言葉で、いい文章を書こうとは思わないですよ。恐らく井村先生は、自分が見た光景を、ありのままの光景を自分の言葉で書いておられると思います。その中に「犬が、垂れ始めた稲穂が、雑草が、小石までが輝いて光って見えるのです」という文章があります。こんな文章が書けるわけですね。この文章を読んでいるときに、私は宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』という作品を思い出しました。

『銀河鉄道の夜』は何が書いてあるのかといいますと、中有の世界の事が書いてあります。中有というのは中陰といいますね。四十九日のことを書いてあるのです。下に北上川がキラキラと流れている。上には天の川の星がキラキラと光っている。それは汽車が上がろうとした瞬間に宮沢賢治はこんな文章を書いておりますね。「河原のすすきが光り、河原の小石が水晶のように輝き」と書いてあります。河原のすすきというのは、雑草ですね。要するに、あらゆるものが差別なく輝いて見える世界が描かれているということです。私は、はっと思いました。そういうことかと思いました。人間は、生と死が限りなく近づくか、あるいは生きていながら100パーセント死を受け入れた時、井村先生の言葉を借りるならば「レントゲン室を出る時、私は決心しました。歩けるところまで歩いて行こう」ということですね。これは死を受け入れた時の言葉です。その次の瞬間、駐車場で見た光景は、あらゆるものが差別なく輝いて見える世界でありますね。

私ははっと思いました。あんなに構えて叔父の病室へと入って行った。何を言われるのかと。あれほど辞めろと言われた納棺夫をまだやっているわけです。叔父の価値観を分かっていたから、家柄、地位、名誉、出世でしたから。私は、小学校、中学校の時代、叔父の言うなりに一生懸命にやってきました。しかし、挫折していく、最後は納棺夫に成り下がった。罵倒される。しかし、あの時入って行った時、叔

父は目に涙を溜めて流し、顔は柔和な顔をして、光顔巍巍として、ありがとうと言った。叔父もあの時、井村先生と同じように、あらゆるものが輝いて見えていたのではないかと思います。看護婦さんも、叔母も、納棺夫に成り下がった私をも差別なく見えていた。そのように考えるしか理解できないわけです。私はそう信じるようになりました。私は、そのような世界を自分自身が見れなくとも、ジェット雲が見えさえすれば空にジェット機が飛んでいるのが分かるように、叔父の顔からそのような世界のあることを知らされたのです。

それからというもの、納棺夫をしていてお顔ばかりが気になりました。今まであれだけの死者に接しておりながら、全然記憶がありません。といいますのは、人間は毎日接しておりながら、何も気づかずに生きています。あるいは目を背けて仕事をしていたのではないかと思います。そのような思いに至りました。それからお顔ばかりを気にしながら見ているうちに、死者のお顔は、みんな清らかで安らかなお顔をしておられることに気がつきました。よっぽど生きた人の方がおどろおどろしい目つきをしています。特に、亡くなってすぐの方のお顔というのは、どのような死に方をされていても、みなさんいいお顔をしておられます。しかし、生き物は死んだ後に硬直します。冷たくなって硬くなっていきます。硬直した後のお顔があまりいい顔ではありません。死を受け入れた方のお顔は、清らかなお顔をされております。しかし、死を受け入れられず、もがき苦しんで抵抗した人のお顔は、あまりよくありません。亡くなってすぐのお顔はいい顔をされておるのですが、最近の形状記憶シャツではありませんが、硬直すると、もがき苦しんで抵抗した時の顔に戻るような気がいたします。

臨終に学ぶいのち

ローマの哲学者セネカ.L.Aという人は、「人間が死を恐れたりするのは、死の付随物を見た時である」というようなことを言っております。その通りだと思います。子供が交通事故などでお亡くなりになる場合、みないい顔をしております。微笑んで眠っているような顔です。これは

動物もそうなんですね。動物が亡くなった直後の顔というのも微笑んでいるような顔です。先日、京都大学の霊長類研究所の所長さんと対談した時にもこの話題になりました。すぐさま所長は、そりゃそうですよ、とおっしゃっておられました。ゴリラとか、サルとか動物というのは、死の瞬間まで死の概念が頭がないから、死に対する不安は生じないそうです。なるほどと思いました。人間の子供というのは、死の概念がまだ確立していませんから、大自然の摂理に随って受け入れていくのだそうです。ところが、私が納棺したおばあちゃん、おじいちゃんの中にはこういう人がおられました。「ようやく阿弥陀さまがお迎えに来られた。有り難いことです。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と言って死を迎えていかれる。この方々は、100パーセント死を受け入れています。ですからそのお顔も実にいい顔をしておられます。硬直してもなおいい顔をしておられます。死を受容するのか、しないのかということは、大変大きな問題です。その一つの例をご紹介しますと思います。

みなさんをご存知だと思いますが、平成9年に酒鬼薔薇聖斗事件がありました。14歳の少年が大事件を起こしました。日本中を震撼させました。その次の年に文芸春秋という会社が、警察の調べた供述調書をすっぱ抜きました。それをちょっとコピーして持ってきました。

君はなぜ人を殺そうなどと思ったのですか、という調査官の質問に対して、少年は次のように答えています。

僕は家族のことなどなんとも思っていなかったのですが、おばあちゃんだけは大事な人だったのです。そのおばあちゃんは、僕が小学校の時に死んでしまったのです。僕からおばあちゃんを奪い取っていったのは、死というものです。だから僕は死とは何かと思うようになったのです。だから僕は死とは何かをどうしても知りたくなり、最初はナメクジやカエルを殺していたのですが、その後は猫を殺していたのですが、町内の猫を何匹殺しても死とは何か分からないのです。やはり人間を殺してみなければ、本当のことは分からないと思うようになっていったのです。

このように当時の彼は警察で供述しております。もしこの供述があ
の事件の根っこにある動機ならば、大人社会が少年たちに死の現場を見
せまい、死の事は語るまい、苦しみや悲しみを与えまいとして育てる
ことが、親の役目のような社会を構築したからではないだろうかと思
いました。このように私は思えてなりません。もっと分かり易くお伝
えするために、別の例をお伝えしたいと思います。

九州のあるお寺へ講演に出かけました。二日市にあるお寺です。出
光の会長を務められた石田さんのご長男が養子に入られ、住職をなさ
ておられるお寺です。ちょうど行きました時に、石田さんの一周忌で
した。帰り際に、石田さんの奥様と住職より一冊の小冊子を頂きました。
それはどのような冊子かと申しますと、17人の親族が石田さんの
臨終の場において、その時の感想文を書かれたものでした。その中で一
番素晴らしいのが、14歳のお孫さんの作文でした。14歳と言えば、先
ほどの酒鬼薔薇聖斗の少年と同じ年です。

僕はおじいちゃんからいろんなことを教えてもらいました。特に
大切なことを教えてもらったのは、おじいちゃんが亡くなる前の
3日間でした。今までテレビなどで人が死ぬと、周りの人があまり
にも辛そうに泣いているのを見て、なんでそこまで悲しいのだ
ろうかと思っていました。しかし、いざ僕のおじいちゃんが亡く
なろうとしているところに、そばにいて僕はとても寂しく、悲し
く、辛くて涙が止まりませんでした。その時、おじいちゃんは僕
に本当の人のいのちの尊さを教えて下さったように思います。そ
れに最後に、どうしても忘れられないことがあります。それはお
じいちゃんの顔です。それはおじいちゃんの遺体の笑顔です。と
てもおらかな笑顔でした。いつまでも僕を見守って下さるこ
とを約束しておられるような笑顔でした。おじいちゃん、ありが
とうございました。

こんな作文です。私が何を申し上げたいのかといいますと、この2人
の14歳の少年の違いを申し上げたいわけです。どこが違うのか。実に
単純なことです。九州の石田少年の場合、おじいちゃんが亡くなるそ

の臨終の場にいたということです。死というものを五感で認識しているということです。この五感で認識するという世界が大事なんです。本木くんがインドのベナレスに行ったからこそ、ここでは生と死が繋がっているのではないかとことを五感で認識したわけです。だからこそいえる文章があります。「その時、おじいちゃんは僕に本当の人のいのちの尊さを教えて下さったように思います。それに最後に、どうしても忘れられないことがあります。それはおじいちゃんの顔です。それはおじいちゃんの遺体の笑顔です。」という文章は、その場にいた子でなければかけないものです。なぜならば、2日後の葬祭場でお棺の蓋を開けて顔を見たときは、それはデスマスクですから、おじいちゃんの遺体の笑顔です、などという文章は出てこないのです。これは生と死が交差する死の瞬間にしか死の実相はないです。死の実相というのは、生の実相でもあります。

例えば、アメリカのエリザベス・キューブラー・ロスという方が著した『死の瞬間』という書物があります。あの方がなぜ医学から宗教的になったかと申しますと、死ぬ瞬間ばかり見ていたわけです。死んだ後のデスマスクばかり見ていたわけではないのです。ですから『死の瞬間』という本が世界的ベストセラーになりましたね。あるいは、マザー・テレサなども死に行く人を腕の中で抱えて見ていたわけです。宮沢賢治もそうです。妹トシが死ぬ時、腕の中で死んでいるわけです。「あめゆじゅとてちてけんじゃ」と言って死んでいった妹トシ。「あめゆ」というのは、みぞれのことです。みぞれを取って来て賢治兄ちゃん、と何回も繰り返す素晴らしい詩があります。「永訣の朝」という詩です。そのような死の現場から生まれた宮沢賢治最高傑作と言われている「永訣の朝」や、「無声慟哭」、「松の針」に続く一連の挽歌です。

いのちのバトンタッチ

最初に申しました。オバマ大統領がハワイのおばあちゃんのもとへ、現場へ行ったということはすごいことだと。もし私が叔父の臨終の場に行っていなかったら、今でも叔父を憎んでいると思います。その現

場から生まれた詩が今日の『いのちのバトンタッチ』という演題になっているわけです。

『いのちのバトンタッチ』

人は必ず死ぬのだから
いのちのバトンタッチがあるのです

死に臨んで先に往く人が
「ありがとう」と云えば
残る人が
「ありがとう」と応える
そんなバトンタッチがあるのです

死から目をそむけている人は
見そこなうかもしれませんが
目と目で交わす一瞬の
いのちのバトンタッチがあるのです

「ありがとう」と言えない場合もあります。しかし、現場に行ったら目が「ありがとう」と言っているんです。この間、岐阜県の郡上八幡にあるお寺さんへ講演に行ってきました。講演が終わって控室へ行ったら一人の立派な紳士が入ってこられました。私は医師ですけれど、東京の大学病院に30年間勤めておりました。その時、教授や先輩から一分一秒でも命を延ばすのが、医者使命であると教育され、私もそれを信じて30年間やってきました。ところがある日、3日前から口も利かなくなったおばあちゃんを担当しました。3日前から口も利けないし、もうそろそろだなあと思って私はモニターを見ていました。すると何か呼びかけられたような気がしましたので、振り返って近づくと、2・3日、口も利くことがなかった老婆が「先生、こっち見て」と言ったのです。はっと私は自分を振り返って、おばあちゃん目を

見た時、おばあちゃんの目はにっこりとほほ笑んで、そのまま息を引き取られました。今まで病気を診ていたけれど、人間を見ていなかった。私はハッと思い、辞表を書き、大学病院を辞めて、故郷郡上八幡へと戻り往診医をしています、と目に涙を浮かべて話されました。郡上八幡でそんな立派な先生にお会いしました。

やはり現場というのは大事なんです。生と死の現場に立たない限り本当の真実は分からないと、私はお伝えしたいわけです。

最後に井村先生が大学ノートに書き遺された文章を読み上げて終わりにしたいと思います。

みなさん、どうもありがとうございます。北陸の冬は静かです。長い冬の期間を耐え忍べば、雪解けのあと芽を吹き出す、チューリップの季節がやってきます。ありがとうございます、みなさん。人の心はいいものですね。思いやりと思いやり、それらが重なり合う波間に、私は幸福に漂い、眠りにつこうとしています。幸せです。ありがとうございます、みなさん。ほんとうにありがとうございます。

ありがとうございます、ありがとうございますを連発して井村先生はお亡くなりになりました。親鸞聖人は、『教行信証』の後書きに、道綽禅師の『安楽集』を引用して、「前に生れんものは後を導き、後に生れんひとは前を訪へ、連続無窮にして、願はくは休止せざらしめんと欲す」とあります。先にあらゆるものが差別なく輝いている世界へと往った人、お浄土へと往った人が、後に残った人を導くのですよ、だからそちらをお訪ねなさいと、きちっと書き押さしておられます。

最後になりましたが、映画を通して、最終場面は何なのかと。私は「おくりびと」の最終場面が死後硬直した主人公の父親の手に石が握られていたことが問題だと思うのです。そのようなことでは困るのです。そのような状況では、「前に生れんものは後を導き、後に生れんひとは前を訪へ」ということが伝わらないわけです。このことを制作委員会に伝えても理解されない。息絶え絶えでもいいから、そのお父さんが生きている形で、納棺夫に成り下がった息子の手でも握って「ありが

とう」の一言でも言って亡くなっていくという形にできないのか、と制作委員会に伝えました。それが「いのちのバトンタッチ」なのだからと。いくら言っても駄目でした。それでは伝わらない。ここに私が根本的にこだわった理由があるということを、みなさんに申し上げて終わりにさせて頂きたいと思います。どうもありがとうございました。

岐阜聖徳学園大学 仏教文化研究所開所10周年記念式典
記念講演 2010年10月27日（水）
於岐阜聖徳学園大学 岐阜キャンパス 多目的ホール